
異世界転移

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界転移

【コード】

N8850S

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

学校で寝てると気が付けばまったく別の世界へ行ってしまった人の話です。一部だいたい4000文字ぐらいあるので、長いです。

第1話へ異世界へへ（前書き）

できれば、読んでってください!!!

第1話〜異世界へ〜

「あーあ、なーんかおもしろえことねーかな。」

どうもこんにちは。俺の名前は、古鳥咲弥ふるとりさくやといいまーす。最近、する事が、全くありません。というより、ゼーんぶあきましたー。

「……………ああー！もう、する事なさすぎて、暇だあああああ
ああー！」

やばい、気狂ってきた。悪化する前にねよ。

四時間後

「……………プリン、かえせええええつ！なんだ、夢か。つて、何処だ、ここおおお！」

俺さっきまで学校にいたよな！なのに、何で、俺は、森の中にいんだ！おかしいだろ。しかも、横にバカでけえ猪が寝てるしよおおお！起きたら、死ぬぞ、こん畜生がああああああ！」

「とつ、とりあえず、起こさずにここから出ねーと。」

「ホントに、ここは、何処なんだ。」

森から出れて、町に着いたのはいいーけど、なんで、周りの人は、獣耳なんだ？犬やら猫のような耳をつけて、恥ずかしくはねえーのか？

「すいませーん。」

「はい。なんでしよう？」

「ここは、何処でしょうか？」

「ここは、ウイザード共和国の、コンフュースタウンですよ。」
「どこだよ、それ。」

「わかりました。できればこの町を、案内してほしいんですが？」

「なにつて、魔法ですけど？」

「意味わかんねーよ！そんなこといわれても！魔法のことについて説明しろ」

「魔法とは、この世界に住んでいる精霊達の力を借りて、相手にその力をぶつけることです。最後に言う言葉は、正直自分でかっこいいと、おもうのでいいです。魔法の種類は、風、炎、水、雷、地、草の6種類があり、伝説の中に、龍、の魔法もあると言われてます。」

「なるほど、分かった。じゃあ、魔法の使い方を教えてくれ。」

「適当でいいですよー。精霊に力を借りて、適当に魔法名を、言えばいいんですから。」

「は？何言っただ、お前。」

「だから、精霊に力を借りると、宣言して、適当に魔法名を言えばいいんですから。」

「無茶苦茶だな。魔法使うのつて。まあ、とりあえず、そこから練習してくるから。」

「炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」
ポーン

「威力ひつくうううううううううううううううううううううう！」

「なんでだよ。言われたとりにしたのになんだよ、この威力、低すぎんだよおお！」

「どうしました？」

「いや、どうしたって言われても困りますよ。言われたとりに、言われたとりにしたのに、なんなんですか、この威力、低すぎやしませんかあ？」

「そりゃあ、そうですね。だれでも、最初は、そんなもんですから。」

「はあ、そうですね。」

練習しなきゃいけないのか、めんどくさっ！

「よしっ、もう一回やってみよー。」

「炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」

ドツカアアアアアアアアアアアアアアアア

え？2かいめですよ。なんですか、この威力、ふざけているんですか？

「なっなんですか、今の！」

「知りませんよ！こっちが聞きたいです！」

「とりあえず、もう一回やってみてください。」

「炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」

ポンッ

「……………え？あなたは、さっき、本当に魔法を使いました？」

「使ったよ！俺が何かを使って魔法を使ったと思うのか！」

「そう思ったから聞いているんですよ！」

「わかった、もういい。とりあえずこれだけは言っておく。俺は、魔法を使ったからな。」

「はあ、これで、レジスタンスに対抗できる仲間ができると、思ったのに……」

お前、俺が、仲間になるとおもってたのか？まあ、俺もそのつもりだったんだが。

「まあ、頑張つて練習してみるわ。まともに使えるようになったら、お前の所に行くから、それまで頑張つといてくれ。」

「ということは、まともに魔法が使えるようになったら、私達の仲間になってくれるということですか？」

「そういうことだ、それじゃあ、またどこかで。」

「また会いましょう。」

「で、これから俺は、どーしたらいいんだ？」

がる。

「咲弥さん、お兄ちゃん、二人ともうるさい！」

「ごっつ、ごめん。」 「すまなかつた、エデュアアアアアアアアアアアア！」

「お兄ちゃん、うるさい！」

本当に、こいつ駄目だ。感情が暴走してやがる。

5分後

「さて、さつきは、すまなかつた。」

「いや、分かってくればいいんだけど。」

「お兄ちゃんって本当に人の話を聞かないよね。」

「はははははははは………。」

こいつは普通の人なのか？いや、シスコンって所で、普通じゃないか。

「そういえば、自己紹介してなかったな、俺の名前は、セルスIIアルクールだ、セルスって呼んでくれ。で、咲弥は、こんな所で何をしてたんだ？」

こいつ、いきなり下の名前で呼び捨てかあああああああああああああああ

「いや、こいつと、別れてから、魔法の練習をしようと思ったたらお前に襲われたんだよ。」

「だから、すまんって言ってたんだろうが。」

「咲弥さんって魔法の練習法も知らないのに、どこかに行こうとしてたんですか！」

「悪いかよ。この世界よくわかんねーんだから。」

「悪いですよ！レジスタンスに会ったらどうするつもりだったんですか！」

「全力で逃げる！」

「無理です、絶対に。」

最悪だ、思いっきり否定された……………

「そんなことないだろ、頑張ったらどうにかなるって。」

「だから、無理なんですって、咲弥さんは知らないでしょうが、追尾型の魔法もあるんですからね。」

「……………まじか。」

勝手に行くんじゃないかった、今本当に、レジスタンスに会わなくてよかったあ。

「勝手に行って、すまん。それじゃあ、魔法の練習法を教えてくださいかねーか？」

「とりあえず、撃ちまくる事です。そうしたら、自然に威力が、上がっていきますから。」

……………本当に、この世界って適当だよな、絶対に。やること全てが簡単なんだよな、魔法の使い方も練習法も無茶苦茶だし。

「わかった、この近くで、練習できる所知らねーか？」

「ここから5時間、歩いた所に、流れの強い滝があります。そこで練習してください。」

「……………いやいやいやいや！遠すぎんだろ！なんでこんなに遠い所にあるんだよ。」

「だって、周りをよく見てくださいよ、レジスタンスがいつぱいいるんですよ。そんな所で魔法を使ってみてください、考えたらわかるでしょう。」

「どう考えてもレジスタンスがよって来るな、俺死ぬな、思いつきり袋叩きだな。」

「でしょ、だから、一番近い所で、安全な所が、ここから5時間かかるんです。」

「マジでか、じゃあ、がんばってそこまでいってくるわ。じゃあな。」

「待ってください。その滝への道は、交差点が多くて初めての人だと絶対に迷いますよ。だから、一緒に行かせてください！」

「良いけど、お前らも練習すんのか？」

「いえ、咲弥さんの練習を見ておきます。もう、練習しても、あまり変わらないので……………」

「そうか、わかった、じゃあもしダメなところがあったら教えてくれ。」

「私達で力になれるなら。」

「えっ、それって俺も行くことになってんの？」

「当たり前でしょ、お兄ちゃん。」

「うわっ、めんどくさっ！」

「じゃあ、来るな、俺お前苦手だから。」

「これから行きましよう、咲弥さんっ！」

「はいはい、わかったよ。」

「これから俺どうなるんだ？」

第1話〜異世界へ〜（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
感想またはダメ出しお願いします！

第二話〜修行場へ〜（前書き）

やっと完成……………けっこう時間かった。それはおいといて読んでいってください……………！

第二話〜修行場へ〜

どうもこんにちは、最近異世界に飛ばされてしまった古鳥咲弥ふるとり さくやと言
うものです。早く帰りたいんで誰かワープホールみたいなものを出し
て俺を帰してください。

「なあ、そういえば、俺がともに魔法が使えるようになってから
じゃなかったっけ？」

「そういえばそうでしたね、咲弥さん。」

今話をしているやつが、エデュア「アルクール」と言う、俺がこ
の世界に来てからいろいろ教えてくれたやつだ。

「えっ、お前達そんな約束してたの！」今驚いたのが、セルス「ア
ルクール」と言うエデュアの兄だ。

「してましたけど、どうしたのお兄ちゃん？」

「じゃあさ、俺ついていかなくてもよくね？」

うん、ついてきたくないなら来なくていいよ、お前がいたらめん
どくさいし。

「いやなら来なくていいよ、どうするお兄ちゃん？」

「いや行く、エデュアと離れたくないから、絶対に。」

忘れてた、こいつはシスコンって事忘れてた。本当にこいつは、
エデュアのことになるとうるさいからなー無茶苦茶うざいんだよな。

「はあ、お兄ちゃん？何でいつもそんなにうるさいの？」

「それはだな、エデュアへの思いが溢れているからだ！」

「お兄ちゃん、気持ち悪いからちよつとの間話しかけてこないで…

……………」

そりゃそんなこと叫ばれたらそうなるだろうな、セルスって妹の
ことになるとうざいほど気味が悪くなるだろうな……………」

「ちよつと待ってくれ！俺はエデュアと話せないだなんて、嫌だぞ。

」

「お兄ちゃん、人の話聞いてた？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「謝って許されると思ったの？お兄ちゃん？」

「駄目なのか！！！！！！」

「そんなことどうでもいいから、早く行こうぜ、いつまで喧嘩してんだ！！」

「あなたは黙っていてください！そろそろ本当にこの気持ち悪い性格を直してほしいんです！」

「そんな………こんなに嫌われてたなんて………」

「お前、今頃気が付いたのか。やっぱり俺は、お前のこと可哀そうにはまったく思えないわ（笑）」

「（笑）ってお前ひどすぎんだろ！何でこんなにいろいろ言われなくちゃいけないんだよ！」

「お前の性格が気持ち悪いからに決まってるんだろ！馬鹿か、お前は！」

「そつだよ、お兄ちゃん。だから早くその性格直してよ！」

「はあ、俺はこんなに気持ち悪いと思われてたんだな………」

「………」
「こいつ、マジでへこんでる、なんかすげー笑えてくる、こらえるのがけっこうきつい。」

「そんなにへこまないでよ、お兄ちゃん。少しずつ直していこうよ。」

「こいつ、あんなにウザい兄にも優しいんだな。」

「いいのか？こんなのも一緒にいてもいいのか？」

「当たり前でしょ！これでも兄妹なんだから！」

「やっと話が落ち着いてきた所だし、早く行こうぜ、日が暮れるぞ。」

「………」
「そついえば、もう3時だな。」

「どうやったら時間が分かるんだ？」

「どうしたらって、この腕時計ですけど、咲弥さんの世界にはあり

「できるだけ早くお願いしますねー。よしっ、風の精霊よ、新たにできた物体を動かすのを手伝いたまえ、地の精霊よ、風の精霊が動かす物体を作りたまえ！メイクレブスリアスタ！」
バキバキバキバキバキバキバキメキッツ

「でーきたつと、さあみなさんこれに乗ってください！……………」

…………… 乗りましたね、じゃあいきますよお

おおおおおおおお！メイクレブスリアスタ！」

「なんで二回も言うんだ？つてうわあああああああああああああああああああ……」

ブワアアアアアアアアアアアアアアアアアア

40分後

「着きましたよー、咲弥さん、お兄ちゃんつて咲弥さん大丈夫ですか！」

「やつぱ、初めはそうなるか、でもこんなにひどいやつは、初めて見たわ（笑）」

「（笑）じゃないですよ！泡吹いて倒れてるんですよ！早く助けないと！草の精霊よ、目の前の物体の傷を癒し助けたまえ！マテルスケアリウル！」

シューアアアアアアアアアアア

「ん、何があつたんだ？」

「何があつたじゃねーよ、お前は今の今まで泡吹いて倒れてたんだよ、でエデュアの魔法で助かったわけ。理解できた？」

「俺はそこまで馬鹿じゃねーよ。とりあえず、エデュアありがとな。」

「へっ？あつ、はい！どういたしまして。」

…………… お前今何考えてた。」

「えっ、なっ何も考えてませんよ！」

「そうか、でも今の言い方なんか怪しいな。」

俺はさつきも言ったとおりけっこうきつい山道を40分ほど歩いているんだ、元の世界の俺だったらもうぶっ倒れてるな。

「はあはあ、まだつかねえ、しかも迷ったし……」

「早く元の世界に帰りたい。」

「ん？今なんか聞こえた気がする、まあ気のせいかな？」

「やっぱりなんか聞こえる、気のせいなのか？」

ガバアアツ

「誰だ！そこにいるのは！」

「咲弥さん、ちょっと待ってくださいよ、薬草のこと聞いてないでしょう。」

「なんだエデュアか、あーびつくりしたあ。」

「どうしました？まさかレジスタンスに会ったんですか？」

「いや、エデュアのことをレジスタンスと間違えただけだ。」

「咲弥さん、そんなこと言わないでください、私は王国軍ですよ。」

「そんなことは、わかってるって、で、話を変えるがいつになったら滝につくんだ？」

「森の入り口にワイプホールがあるのでそれに乗ったら着きますよ。」

「……………それを早く言ってくれ、なんのた

めにここまで歩いたんだ、俺は。」

「滝に行くためじゃないんですか？」

「そうだけど、たしかにそうだけど、どう頑張っても滝に着かないんだよ！」

「だって、ここに滝なんて無いんですから。着くわけじゃないですよ。」

「は？じゃあ何でこんな所に来たんだ？」

「もう一度言いますよ、ここにワイプホールがあるからですよ。」

「じゃあワイプホール以外の移動方法はないんだな」

「はい、そうですけど、何か問題でも？」

「大有りだ、当たり前だろ、そんなこともわからないのか？」

「だって、そこにあるじゃないですか、ワープホールが。」

「えっ？マジで！……………本当だ、こんな所にある。」

「でも、咲弥さん、入り口で右に曲がったらすぐにここに行けたのに、まっすぐ進んだのですか？」

「俺この世界来たの初めてだからよくわからないんだよ、お前等に道教えてもらおうとしたら、セルスがぎっくり腰になったんだろ、おかげで聞きそびれたんだよ。」

「そうだったんですか、それならまあいいです。早く行きましょう、アップサイドダウンホールへ！！」

「やっ」ともに進めるけど、いつになったら俺帰れるの？誰か教えてくれませんか？早く帰らせるおおおおおおおおおお！！！！

第二話〜修行場へ〜（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

第三話　修行開始（前書き）

だいぶ時間かかった……

第三話　修行開始

「へー、こんなに簡単に行けたのか。」

「はい！知らないのは咲弥さんだけですよ、ほとんどの国家軍はここで練習してレジスタンスと戦っているんですよ。」

「へー、で、今思ったけど反乱軍のことは、レジスタンスって言うけど、国家軍はなんて言うんだ？」

「そういえば、言ってますでしたね、国家軍はニュートラルって言います、中立って意味なのに思い切り戦ってますよね。」

「確かにそうだな、んじゃそろそろ始めよう、やり方は魔法を打ちまくったらいいんだろ？」

「はい、確かにそうですね。言葉で覚えるより体でおぼえる方が早いですしね。」

「じゃやってみよ、炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」
「ぱちっ」

「……………あのーまったく届かないんですけど、どうしたらいいんですか？」

「それは咲弥さんが下手だからです、滝に届けば威力はけっこう高くなっていますから、伝説の龍の魔法使いもここで特訓したらいいですから。」

「へー、そうなんだ、でもそれって何万回も撃たなくちゃいけないんだろ。」

「そりゃそうでしょう、めんどくさくてもやらないと意味が無いですから。」

「あーもうめんどくさいとか言ったらんねえ！炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」

ポンッ

「なあエデュア、これって別の言葉を繋げたらなんか変わるの？」

「さあ？途中で詠唱を増やす人はいませんでしたけど………やつてみたらどうです？」

「じゃあ、炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！煉獄！」

バコオオオオオオオオン

「おっ、威力上がった、やった。」

「やったじゃないですよ、どれだけ威力上げたらいいんですか！」

「知らないよ、そんなこと言ったらって、言われた事やっただけだから、いろいろ言うな。」

「ちよつ、ちよつと私も試してみます！風の精霊よ、我らと協力し、敵を討つ力を貸し与えたまえ！クレイスアブナ！連弾！」

ドッドドドオオオオオオオオン

「っ！本当に上がっちゃいました………こんなことがあるなんて。」

「これってみんな知らなかったのか？適当に思いついたことなんだから。」

「みんな頑張つて練習して強くなってるんですから、言葉を増やしただけで威力が上がるなんて考えないと思いますよ。」

へえ、そうなんだ、みんな努力してるんだ。じゃあこつちもあまり使わないようにしないとみんなまねするんだろうな。

「じゃあ練習続けますか。めんどくさいけど。」

「へえ！言葉を足して練習すると思っていました。そこまで馬鹿ではないんですね！」

誰が馬鹿だ！ふざけるな！こつちは頑張つて練習しようと思ったのに馬鹿だと！どれだけ信用無いんだ。

「そこまで馬鹿じゃねえよ、なめんな！」

「いやあー、おもいつきり魔法に言葉を足して暴れると思っていたんですけど、気のせいでしたね。」

やっぱり誤解してた………いつも会ったやつには誤解されるんだよなあー、今までできた友達は絶対にサボリ癖があると

見るか！水の精霊よ、目の前の物体を流しつくせ！エイブンレクイアス！」

ピッチャン

ピッチャン

「うぎゃあああああ！！！！まったく出てこねええええええ！！！！」

「咲弥さん！言葉をたしてださい！！」

「あ、そっかその手があったか！もう一度やってみる！水の精霊よ、目の前の物体を流しつくせ！エイブンレクイアス！激流！」
ブワアシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

シュウウウウウ

「はあはあ、なんとか消えた……………疲れたああああああああ！！！！こんなに疲れるのか、魔法って！」

「疲れるのかって、山を無くすぐらい魔法使ったら疲れるに決まってるでしょう、ちゃんと考えて使ってください！」

え、俺、山ぶっ壊したの？と言うより、あんまりうまくないんだから、調整なんかできるわけないだろ！はあこの世界に来ていいことあんまり無いな、いいかげん早く帰りたい、いつになったらこれ帰れるの？誰か教えてくれ。

ドサツ

「咲弥さん！咲弥さん！大丈夫ですか！あゝ！また咲弥さんが倒れたああああ！！！！また回復させないと！草の精霊よ、目の前の物体の傷を癒し助けたまえ！マテルスケアリウル！」

シュワアアアアアアアアアアア

「ん？エデュア？なにがあった？」

「また倒れたんですよ。」

俺なんで倒れたんだ？魔法使いすぎたからか？それとも魔法を誰かから撃たれたのか？まあ、どっちでもいいか。

「エデュア、そろそろ始めようぜ！」

「はあ、咲弥さん、あなたは馬鹿なんですか？さっき魔法の使いすぎで倒れたのにまだやるんですか！」

当たり前だ、考えてみる、俺は早く帰りたいんだっ！！！こんな所いつまでもいてられるか、早く帰らせる！！

「まあ、いいですけど、また倒れても知りませんよ？」

「気にすんなっ！！！」

「今、はつきりとわかりました、咲弥さんは正真正銘の馬鹿ですね！」

ぐっ！こいつ酷い事言いやがる……………、早く帰りたいから、レジスタンスのリーダーにあたる野郎を潰したら帰れると思ったから、できるだけ強くなって倒そうと考えてたのに、馬鹿って酷いなあ……………。

「……………まあ、あんまり気にするな……………、はあ。」

「馬鹿に馬鹿って言っても問題は無いでしょう？」

やっぱり酷い……………、努力したら実を結ぶってことを信じて頑張ろうとしてたのに、馬鹿って酷いなあ……………。いい加減に修行の続きさせてくれよ……………。

「もう馬鹿ってことは認めるから、もういい加減修行の続きを始めようぜ。」

「あなたは休憩することを知らないんですか？」

「早く帰りたいから修行を始めようって言ってるの！」

「そうでしたか、でも自分の体力の事も考えてくださいよ。」

こんな騒動で修行がまったくできなかつた、できるだけ早く帰りたいのに、なんかまったく帰れる気がしない……………。誰か帰れる方法教えてくださーい！！

第三話〜修行開始〜（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
後、次の更新だいが遅くなります。

第4話 新たな事実 (前書き)

更新遅れましたが、何とか書き終えました
今回は新キャラが2人、登場です。

第4話〜新たな事実〜

「なんで今お前俺に体力のことを考えろって言ったけど、俺体力には自信あるんだぜ。」

「でも、咲弥さんさつきから息切れてますよ。」

「ぐっ！正論を言うな、そんなことぐらいわかってる、わかっているけど早く帰りたいんだ！無茶苦茶帰りたいんだ！帰るために頑張ってるんだ、そんなこと言わないでくれ！」

「まあ、馬鹿だから気が付かないんでしょうが。」

「最近、エデュアからの言葉に毒が入ってることが多い……。いい加減馬鹿馬鹿言うのをやめてくんねえかな。」

「お願い、もうやめて、俺の精神がもたない……。。」

「……………嫌です！！」

「きつぱりと言われたああああああ！！もう嫌、こんな世界早く帰りたい……。。」

「なっ、なんで、嫌なんだエデュア、そして、お前人の気持ち考えたことある？」

「最初の質問から答えますね、嫌だからです。二つ目は、考える訳ないでしょう、いじめる対象の気持ちなんて。」

「あゝ、やっぱいいじめてた。おまえDSだろ。」

「それ以外の何だと言うのですか？」

「ぎゃーー！ー！！もうなんっつにも言い返すことがなああああああ
あい！ー！ー！ー！

「……………」

「どうしました、咲弥さん。もう言うこと無くなっちゃたんですか？」

「心読まれた！こういう時どうしたらいいんだ！……………、そうだ！練習の話に戻したらいいんだ、よしそうしよう。」

「そんなことは、どうでもいいから早く練習始めようぜ！」

「話を変えないでください、なんで何も答ええないんですか？今すぐに答えてください！はい！いうことは？」

「うぎゃあああああああ！！こいつにもう言い返す事がないって分かって言ってるよ！」

「……………もう、何も言う事はありません……………。文句言ってすいませんでした。」

結局、謝ることしかもう方法がなかった……………。まったく言い返せない、言う事が酷いから。

「じゃあ、そろそろ練習に戻りましょっか。」

「うん、そうだな……………はあ。」

もう嫌、今すぐにでも、帰りたい。こんなとこ早く出たい。

「よし、やるぞ。炎の精霊よ、我に悪を討つ力を貸し与えたまえ！アスリマテリアル！」

「……………。」

「……………出ませんね。」

「出ないな。魔力でもなくなったか？」

「この世界で、魔力なんてありませんよ。疲れたんじゃないんですか？」

「いや、あんまり。と言うか、この世界魔力無いの？」

「そうですよ、ここでは、精霊に力を借りるとき、魔力ではなく、精神力を使って精霊を呼び出すんですよ。」

へー、そうなのか。疲れたら、魔法使えなくなるのか。めんどくさいな、この世界。じゃあ、魔法を使わなくても修行できるんじゃないか？

「わかった、じゃあ、座禅でも組んで休んでみる。」

「はあ、そうですか。じゃあ私は、薬草を取ってお兄ちゃんの所へ帰ります、それでは。」

やっと、一人になれる。真面目に座禅を組むことなんか、集中力なんて持たないけど。

ブウオオオン

「さて、始めるか、座禅。」

「お兄ちゃんって、確かぎっくり腰だったよね……。なら、この薬草とこれを配合すれば、骨を直す成分ができるはず。」

ガサガサッ

「誰っ！！」

「誰って言うなよ、エデュアよ。」

「お兄ちゃん？」

あれ？お兄ちゃんってこんな話し方だっけ……。お兄ちゃんには悪いけど、まったく覚えてない……。

「こんな所で、何をしてるんだ、早く帰るぞ。」

あ！お兄ちゃんは、ぎっくり腰で動けないんだっ！じゃあ、このお兄ちゃんは偽物！

「あなたは誰っ！お兄ちゃんじゃない！！」

「へー、もう気が付いたんですか。普通の人ならまったく気が付かないのに。まあ、正体を明かしましょうか。僕は、レジスタンスの幹部の一人のアース＝デルベルスと申します。以後、お見知りおきを。と言うわけで、ここで死んでいただきます。エデュアさん？」

「どうして私の名前を、知っているのですか？」

「それは、あなたが、ニュートラルの幹部の一人だからです。」

そういえば、そうだっけ？あんまりニュートラルの仕事に参加してなかったから、そんなこと忘れてた。

「それに何の関係があるのでしょうか、アース＝デルベルスさん？」

「あなたの存在が結構邪魔なんですよ。僕たちレジスタンスにとつて。仲間の治癒には、普通10分以上かかるのに、あなたはなぜか1分以内に終わらせることができるほどの強さを持っているからです。」

へー、普通、人を回復させるのにそんなに時間がかかるのですか。いつもすぐに終わらせていたから、分かりませんでした。そんなに

私、早かったんですね。幹部になれた理由がようやくわかりました。「それで？私に何の用でしょうか。えーと、誰でしたっけ。」

「アースIIデルベルスだ。名前を覚えておいてくれ。あと、もう一度言う、ここで死んでくれ。」

「それでいいって言うと思う？」

「いえ、思いません、だからここで殺されてください！地の精霊よ、我の一部となりて、全てを滅ぼせ！」

メテオアビスベリクス！」

「げ、この人、魔法を自分に当てて戦うタイプに人だ！」

「早く倒さないと……、こういうタイプの人はどうも暴れてくる！」

「へー、やっぱり、分かっているんですね。その通り、私は、魔法を自分に当てて戦います、でも、どんどん暴れたりなんかはしませんよ。」

「じゃあ、一気に決めてくるタイプか！」

「暴れる前に殺しますよ。」

「違った！」

「できるものなら、やってみなさい。できるならね？」

「ほう、そうきますか。大体の人は僕の威圧感を感じて逃げ出すんですけど。まあいいでしょう。エデュアさん、覚悟！」

「あー、始めるって言ったけど、やる気が、まったく出てこねえ。」
エデュア、帰れたのかなあ、薬草のこと忘れて帰ってたら笑えるな。

「……やらねえと帰れないし、ちゃんとやるか。……」

「……」

「……」

「……で、誰、お前？」

「お前こそ、誰？俺、今さつき着いたらなんかいたんだけど。」

「なんかって……、人だから見たらわかるだろ……。まあ、俺は、」

この世界の人たちみたいに獣耳はついてないけどさあ。

「じゃあ、自己紹介するわ。俺は、咲弥って言う、よろしく。」

「僕は、クリア＝デルベルスって言うよ。ニュートラルに入ってるよ。」

「おおー、じゃあ仲間だな。よろしく！」

「で、なにしてるの？」

「座禅。」

「なにそれ？」

「この世界には、座禅って言葉もないのか？」

「足組んで、集中する修行みたいなもの。」

「ああー、それ知ってる。へー、座禅って言うんだ。」

「なんだ、この世界にない事じゃなかった。よかった。いちいち説明するのめんどくさいし。」

「うん、座禅って言うけど、そういう、お前は何しに来たんだ？」

「道に迷ったら、ここに着いた！」

「あ、こいつ、馬鹿だ。俺より、ひどい馬鹿だ！」

「ふーん。じゃあ、一緒に練習しようぜ！座って話すよりさあ！」

「そうだな！早く始めようぜ！じゃあこっちから撃つぞ！炎の精霊よ！我と共に協力して、敵を倒せ！スレイブインペルク！」

「おおー、すげえ！そんなこともできるのか！」

「お前って、別次元から来たの？」

「え、今こいつなんて言った？」

「お、おいつ、今、お前なんて言った？」

「え、お前って、別次元から来たの？って聞いたけど、なんかあった？」

「いや、合ってるからさ、他にも別次元から来た人いるの？」

「うん、結構いるよ。周りの人の中で耳が犬がこの世界の人、猫とかお前のような耳のやつは、別次元の人だったと思うよ。」

「思うのかよ……こっちは早く帰りたいのに。って、待てよ！他にもいるなら、その人たちは、俺より前に来てるって事だろ。だっ

イブいるから。」

なに、俺またおかしなこと言われてる？今、毒がどうとか言ってたよな。もう、自分の事すらわかんなくなってきた。

「ごめん、もう何もかもが意味わからなくなってきた。説明してくれ。」

「だから、お前の魔法に毒の追加能力があると思うって言ったの。

他の追加能力なら、重力追加とか、魔法一時禁止とかがあるよ。」

ああ、わかった、覚えることが多すぎる。えーと、とりあえず俺の魔法には、行動不能の毒の追加能力があるってことか、………ってじゃあ練習しても、何にも上達しないのは、この毒のせいじゃないのか？

「なあ、こういう追加能力があるやつって上達遅いの？」

「多分、遅いよ。毒の能力にもゲームで言う経験値が振られるから、全部が一緒に育ってるって感じだから、遅いと思うよ。」

嘘だろ、と言う事は、俺は普通の人より以上に努力しなけりゃいけないのか！めんどくせえ！もう、今すぐにも帰りたい……、誰か帰る方法教えてください……、お願いします。

「多分無理だと思うよ。帰るの。」

「お前、心読めるの？」

「小さな声で言ってたよ、僕、耳はいいから。」

へー、って声に出てたんかい、俺の心の声！だるっ、と言う事は今までの会話全部口に出てたって事？

「なっ、なあ、今まで、思ってたこと、口に出てた？」

「いや、今のただけかどうかしたのか？」

「いや、今までいろいろ考えてたから、口に出てたら、恥ずかしいじゃん。」

「そうか？僕、大体思ったこと言ってるから、そういう事考えたこと無い（笑）」

「馬鹿だろ、お前、絶対に馬鹿だろ。」

「そうだよ、学力もそんなにないよ、それがどうかしたの？」

馬鹿だ、こいつ、人の話を理解してない。

「もういい、そろそろ修行再開するぞ。」

「ええー、めんどくさいな、と言うより、毒治らないんだけど、普通なら、時間が経てば治るんだけどな、お前の毒、効果が長いな。」

「へー、じゃあ、ちよつと休憩するか。」

あーあ、また、修行できねえ、早く帰りたい、帰らせてくれ。誰でもいいから帰る方法教えてください。

第4話〈新たな事実〉（後書き）

サブタイトル、メチャクチャですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850s/>

異世界転移

2011年9月25日03時13分発行